

特集：卵子学会の歩み

哺乳動物卵子談話会の思い出 Memories of Colloquium of Mammalian Ova Research

星 和彦^{1,2}

Kazuhiko Hoshi^{1,2}

¹山梨大学名誉教授 〒409-3898 中央市

²医療法人社団スズキ記念病院名誉病院長 〒989-2481 岩沼市

¹Professor Emeritus, Faculty of Medicine, University of Yamanashi, 1110 Shimokato, Chuo, Yamanashi 409-3898, Japan

²Honorary Director, Suzuki's Memorial Hospital, 3-5-5 Satonomori, Iwanuma, Miyagi 989-2481, Japan

哺乳動物卵子談話会

私が日本卵子学会に初めて参加したのは40年ほど前でした。ハワイ大学の解剖学・生殖生物学教室（主任Prof. R. Yanagimachi）への留学を終えて、東北大学の産婦人科に帰局し、体外受精・胚移植の臨床研究をはじめた頃です。昭和56年（1981年）だったと思います。東北大学農学部の先生方、慶応義塾大学産婦人科の先生方から、会の存在を教えてくださいいただいたのがきっかけでした。かなり昔のことですので、記憶は正確ではないかもしれませんが、お許し下さい。

当時は、哺乳動物卵子の基礎的研究を行っていた農学と医学系の先生方が集まって発足させた「哺乳動物卵子談話会」という会でした。東京の都市センターホテルだったと記憶していますが、50人くらいが入れる小さな会場にプロジェクターが1台、参加者は数十人、産婦人科医の出席はまばらで、慶応義塾大学、東邦大学の先生が数名だったと思います。司会は演者が交替で担当、すなわち発表者が次の講演の司会をするという企画でした。びっくりしたのは発表内容です。失敗談を淡々と話されていました。全体の半分位は、上手くいかなかった実験や、使って失敗した培養液や器具・機器のお話でした。成功例や良好な成績だけが採用される医学系の学会しか知らない私には驚きでした。質問も、「自分も同じように上手くいかなかったので、少し変えてみたら良くなった」とか、「違う器具や培養液もあるので試してみたら」といった質疑応答というより意見交換、ディスカッションで、まさに「談話会」そのものでした。生殖の基礎研究を始めたばかりの自分にとって、この農学系・生物学系の先生方のリアルな体験談、苦労話はよく理解できました

し、新鮮で大変参考になりました。このような談話会の雰囲気は何とも楽しく、とても気に入りました。

私の研究はどちらかといえば精子の側から取り組んだ生殖医療でしたので、研究内容が「卵子の談話会」で採用されるかどうか不安でしたが、快く受け付けていただき毎回発表することができました。

その後、体外受精・胚移植の成功、めざましい発展・普及に伴い談話会の会員数も激増し、会の名称も哺乳動物卵子談話会から哺乳動物卵子研究会、哺乳動物卵子学会、日本哺乳動物卵子学会、日本卵子学会とめまぐるしく変遷することになります。研究テーマも、哺乳動物卵子の基礎研究から、人類および動物の卵子・精子（配偶子）形成、受精、胚発生、着床、遺伝的考察、そして体外受精・胚移植・顕微授精などの生殖医療へと広がり、会員も農学・生物学系の基礎研究者に生殖医療に関わる産婦人科・泌尿器科の臨床医、そして後述する胚培養士が加わり、会員数は2,000名を超えたと伺っております。「談話会」の時代と比べると隔世の感があります。他の学会では経験できない、基礎研究者と臨床医が一堂に会して意見交換できるユニークな学会としての存在感は大きいのですが、私の大好きだった談話会の雰囲気が、会の規模が大きくなるにつれ失われつつあるのは少々残念です。

生殖補助医療胚培養士認定制度

体外受精・胚移植を施行するうえで胚培養士の存在は不可欠です。しかし、体外受精が開始された当初は、現在胚培養士が行っている作業の全てを産婦人科医が担当しておりました。培養液の作製・管理、配偶子・胚の採取・計測・観察・管理、ピペットや採卵・媒精・培養等に用いる各種器具の作製も行っていました。しかし、体外受精の症例が激増するにつれ、産婦人科医が全て行うことは困難で、専門職の援助が必須となり、胚培養士の育成が急務となってきました。生殖生物学の専門知識を有し、体外受精の技術を学んできた

（受付 2018年8月20日／受理 2018年10月31日）

別刷請求先：〒989-2481 宮城県岩沼市里の杜3丁目5番5号
スズキ記念病院

e-mail: hoshi@suzukihp.or.jp

会員が多数所属していた本学会を基盤として、胚培養士の育成を行うことが最適と考えられ、他の関連学会に先駆けて胚培養士の育成と認定のシステムが構築されました。平成14年のことです。平成19年には生殖補助医療管理胚培養士の認定制度も確立されました。現在わが国で体外受精-胚移植や顕微授精を行ううえで、「日本卵子学会認定の胚培養士」の存在は不可欠であり、全国で大活躍されていることはご承知のことと思います。

Journal of Mammalian Ova Research

もう一つ、日本卵子学会には特筆すべき特長があります。平成8年からJournal of Mammalian Ova Research (JMOR)という英文の機関誌が発行されたことです。私はこの雑誌

名の“フリーズ”が大好きで、発音した時の“ひびき”が気に入っています。英文の機関誌を持ちたくてもなかなか実現できない学会が殆どであるなか、規模からみてもそれほど大きな組織とはいえない日本卵子学会が英文機関誌を刊行してきたことは画期的といえます。英文誌の需要が高まった一時期、JMORを他の関連二学会と共同の英文機関誌にできないかと検討されたこともありました。学会の名前から「哺乳動物」は消えましたが、JMORはそのまま残していただきたいと思います。

この度、新生JMORの発刊に向けて準備が開始されたと伺いました。編集委員会の皆様のご努力・ご活躍に敬意を払い、JMORのさらなる充実、発展を祈念しております。